

第51回「Face to Faceの会」たより

演題 I

『連携をみすえた最新糖尿病診療 ～糖尿病センターのとりくみ～』



生活習慣病・糖尿病センター
腎臓内科 骨・内分泌内科
診療科部長 繪本 正憲

近年、我が国では約1000万人と推計されている2型糖尿病患者の治療の進歩はめざましい。新たな糖尿病治療が日常診療で使用可能となっているが、糖尿病患者の治療指標であるHbA1cの治療目標達成率はまだまだ十分ではない。そのような現況の中、当院糖尿病センターにおいて積極的に取り組んでいる最先端診療の取り組みの中で、以下の内容について紹介した。

- 1) 持続血糖モニター (CGM) ・インスリンポンプの専門外来 (iPump ・CGM外来) : 現在、インスリン治療中の患者に保険適応が拡大されたCGMを用いた血糖管理の導入、フォローを行い、その導入実績は全国的にもトップレベルである。
- 2) 糖尿病コントロールチーム (DCT) による周術期 ・がん治療の糖尿病管理 : すべての病棟の入院患者の血糖管理を担当し、安全な手術、がん治療に貢献している。
- 3) 肥満症専門外来 : 新規の肥満症治療薬の臨床導入が始まっており、当科での精査減量入院プロトコルの運用、専門外来でのフォローも可能となっている
- 4) フットケアチームによる糖尿病足病変の集学的治療 : 形成外科、循環器内科、放射線科、心臓血管外科など多くの診療科とともにフットケアカンファランス中心に集学的治療を実践している。
- 5) 腎症進行 (透析) 予防外来腎臓内科とともに、認定看護師、療養指導士、管理栄養士等の多職種による専門指導をおこなっている。特に、蛋白尿、慢性腎不全合併症例を中心に積極的な薬物治療をおこなっている。

連携をみすえた最新糖尿病診療～糖尿病センターのとりくみ～



1. 糖尿病合併症精査と治療教育入院 → 糖尿病大学、合併症治療入院 (月～金曜日、初診担当医へ)

- 経口薬2～3剤で血糖コントロール不良 (HbA1c 8%以上) の2型糖尿病患者の教育・治療・合併症評価
- あらゆる病型の糖尿病に対する初回の治療と教育・療養指導を行います。
- 外来受診当日の個人栄養指導にも対応しております。
- 年1回か2年に1回の合併症定期検査と治療の見直しを行い、病診連携を進めます。



2. 蛋白尿、腎機能低下を認める → 腎症進行予防外来へ (月曜日・森)

- 糖尿病患者で尿蛋白異常や腎機能障害を認める場合は、御紹介ください。
- 腎症に対する栄養指導、薬剤調整、また腎代替療法の検討もいたします。
- 腎症進行予防外来にて、専門医・認定看護師・管理栄養士による栄養指導を
- 早期腎症から透析療法まで、一貫した糖尿病性腎症のケア・治療を目指しています。



3. 糖尿病足病変の集学的治療が必要 → 糖尿病足病変外来へ (木曜日・越智)

- 糖尿病性足病変や、末梢動脈疾患などによる各種足病変の治療を行います。
- 糖尿病内科・形成外科・放射線科・循環器内科・心臓血管外科・膠原病内科・看護部等で院内フットケアチームを作り、患者さんの病態に応じた治療を行います

4. 外科手術、化学療法が予定される → 月～金曜日初診担当医へ

- 外科系診療科の術前・化学療法中の患者、ステロイド療法中の患者などの血糖管理を共担で担当します (入院症例年間465件、2022年)。
- 院内他科で入院治療を行った患者さんを、必要に応じてDiabetes Control Team (DCT) 外来で併診し、安心して地域での糖尿病治療が継続できるよう、サポートします。

5. CGM検査、isCGM導入が必要 → 月～金曜日初診担当医へ

- インスリン療法中の患者や、低血糖発作を繰り返すなど血糖コントロールの不安定な軽口薬治療中の2型糖尿病患者も対象に、FreeStyleリブレProによる2週間 (外来) の持続血糖モニタリング (CGM) 検査を行います。
- 生活記録と合わせてCGM結果を解析し、個々の生活スタイルに応じた栄養指導、療養指導、および治療法の検討を行います。
- 週末・休日を利用した短期CGM検査入院を行い、血糖コントロールの問題点を明らかにします。

～ ご紹介をお待ちしています ～

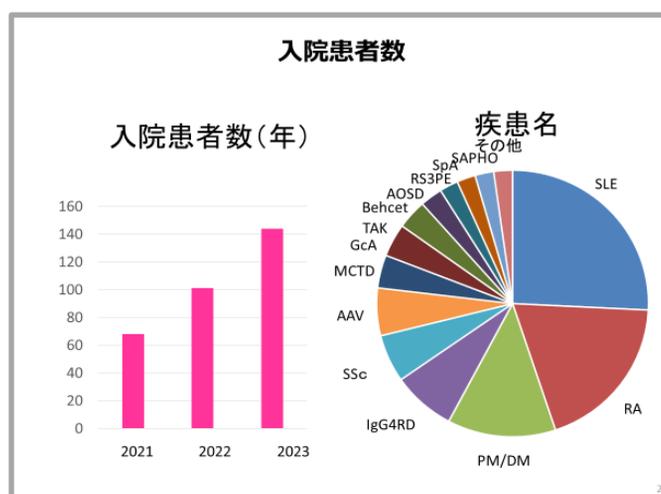
『膠原病内科学の取り組み』



膠原病・リウマチ内科 診療科部長 橋本 求

膠原病・リウマチ内科は、全身性エリテマトーデスなどのリウマチ・膠原病疾患を専門的に診療する診療科として、2021年4月に発足しました。膠原病内科が本学のように単一診療科として存在する大学は少なく、本学は関西では京都大学、和歌山県立医大に次いで3番目の単科診療科になります。従来、リウマチ膠原病の治療の中心はステロイドでしたが、近年は、生物学的製剤などの画期的な治療薬が開発され、治療成績は大幅に改善しました。一方、それらの薬剤は副作用リスクにも注意をして使用する必要があります。当科はそのような治療を必要とする患者さんに対しても、専門的な治療をご提供したいと考えています。2021年4月の発足以来、外来や入院で当科にご紹介いただく患者数は約2倍に増加しました。これは、この地域における膠原病診療に対する大きな期待をいただいているものと考えております。大阪公立大学病院では、様々な診療科との横の連携が緊密であり、膠原病のような症状・所見が多岐にわたる疾患を診療するためは大変適しております。今後も、膠原病を疑うような患者さんがおられましたら、どうぞお気軽に当科にご紹介ください。

付記：膠原病がなぜ起きるかということについて、一般の方の理解を深めていただくため「遺伝子が語る免疫学夜話—自己を攻撃する体はなぜ生まれたか？」（晶文社）を執筆いたしました。ご興味がありましたらご参照ください。



次回開催のお知らせ Face to Faceの会

日 時：令和6年6月29日(土) 16:00～17:30
場 所：あべのハルカス25階 貸会議室

発 行：大阪公立大学医学部附属病院「Face to Faceの会」
文 責：患者総合支援センター長 角 俊幸（世話人代表）
連絡先：06-6645-2857（患者支援課）